

## 美術の窓(77)

## 眼差しの交錯、構図の交錯

大和文華館館長 水田 徹

画像の大きさと眼差しによって、画家や彫刻家が神像と人間像を巧みに描き分ける様子を、本誌129号で関口正之顧問が大和文華館蔵「子守明神像」について、続く130号で私が古代ギリシアの祭礼行列を描いたパルテノン神殿フリーズ浮彫によって、それぞれ紹介した。では人間像同士の眼差しを芸術家はどのように交錯させているのであろうか。ふたたびパルテノン・フリーズを例に、その実態を探ってみよう。

図1は北フリーズの右端(西端)の石板に刻まれた騎馬行列図で、右から2番目の青年がこれから馬にまたがるところ、つまり行列の出発の場である。彼の背に寄り添うように立つ少年は弟なのであろう、兄の腰にバンドを締め、それに応じて兄は両手で衣をそっとたくし上げている。画面左のもう一人の青年は、はやる馬を押さえつつ左腕を上げ口を半開きにし、早く来いと仲間を声にかけている(図3)。その呼び声が聞えたのであろう、兄の方は顔を微かに傾げ、右耳を仲間の方に向けてい

る。しかしその眼差しは(図4)声の主から外れ、物思いに耽るかのように宙に浮かぶ。やがて始まる祭礼の神事に一瞬おもいを馳せたのであろうか。兄弟間、友人間の心の交錯に加えて祭礼というこの場の主題が、三人三様の眼差しと仕草の交錯によって見事に表現されているといえよう。

さてしかし、この石板にはさらに二人の人物が刻まれている。先に見た3人の背後に重なるように表されているので見辛いが、注目すべきことにこの二人はすでに馬上にあり、馬も歩行している。つまり行列出発直前の静寂のリズムと行進する騎馬の動勢が、同じ画面上で二重に展開されているのである。前景と背景に静と動を配して対比の妙をねらったという解釈は造形的には成立しても、意味的には行列の出発と行進が同時に起こるとは考え難い。作者の真意を確かめるべく、パルテノンの建築現場に立ち戻ってみよう。

先述のように図1の石板は神殿北面の端に位置し、その右隣は行列の指揮官を表した短い石板を介



図3 図1の部分



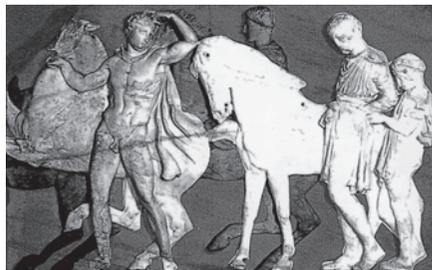
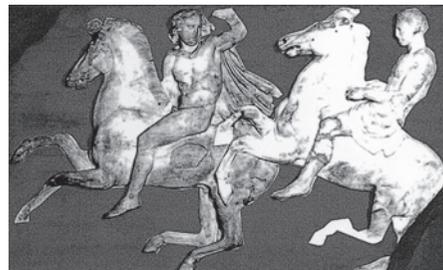
図4 図1の部分

して西の最初の石板(図2)につながる。つまり両石板は神殿の北西の角を挟んで隣り合い、従って当時の人々は両者を連続して一望の下に、丁度いま我々が図1と2を並べて見るように、眺めることができたのである。そのことを念頭に両画面を同時に視野に入れてみると、図1の背景を行進する2騎の騎馬像は、実は図2の騎馬行進の延長線上に位置し、しかもそのポーズと斬減していく彫りの深さから見て、図2の騎馬行列に続く先頭の2騎であることが判る。つまりここでは個々の像だけではなく二つの行列が、行列同士でも重層しているのである。ちなみに図1、2は両石板の像をコンピューターを使って手前の像から奥の像に向かって少しずつ明度を変えて画像処理してあるので、この重層の様子が視覚的に一層強く実感していただけよう。

恐らく作者は、北フリーズ最後の石板に行列最後尾の情景、つまり騎乗準備の場面を描くことによって、北の行列の末尾を意味上、構図上締めくくり、同時にその背

後に西の行列の先端を重層させることによって、西の行列もまた同じ一つの祭礼に属していることを示そうとしたのであろう。

そして最新の学説によると、西フリーズの騎士たちは北フリーズとは違って、歴史上のアテネ市民の姿ではなく神話時代のアテネの英雄たちを描いた可能性が高いという。詳しくは機会を改めて論じたいが、仮にこの新説が正しいとすると、北と西の騎馬行列は同じ祭礼に属するとはいえ、歴史時代と神話時代という時代を超えた二つの行列を表しており、かつそれが神殿の北西の角で交錯していたということになる。祭礼行列の姿を借りてアテネの歴史の新旧の交錯、新旧の統合を示すこと、それがパルテノン・フリーズの制作意図であり、ひいてはこの神殿の真の造営目的であったと考えられるのである。眼差しの交錯と構図の交錯がついには歴史の交錯をも図像化する。造形美術の表現力の強さと奥深さを改めて垣間みる思いがしてならない。

図1 パルテノン北フリーズ  
第47石板  
「北騎馬隊行列」図2 同西フリーズ  
第2石板  
「西騎馬隊行列」

季刊 美のたより No.135

平成13年7月6日

発行 大和文華館